校長室だより～燦燦～ №４５８

速読のすすめ

2021.11.17

小学校や中学校の国語の授業を参観していると、気になることがある。それは、「音読」である。音読、すなわち声に出して教科書を読むという活動である。昔から当たり前のように行われてきた学習活動である。

授業の設計図である学習指導案には、「音読をする」とある。授業を見てみる。目の前には“一人一文読み”が展開される。一人一人、順番に一文ずつ音読していくわけである。全体としては、音読しているわけだが、学習は個において成立するのである。一人あたりの音読量が問題である。全体としては、５分から１０分、音読したとしても、一人当たりではわずか数秒である。おまけに、音読が苦手な子どもは、恥をかかないようにと、自分が読む文を見つけて、それを正しく読むことに全神経を集中させる。そして、読み終わると、ほっとする。他の人の音読など聞いてはいない。

これでは音読できる力がつくわけがない。なおかつ楽しくもない。全員に音読量を保障するのであれば、「斉読」がよい。全員が一斉に音読をするのである。音読が苦手な子どもでも、自分の読みが間違っていれば、まわりの子どもたちが正しく読んでいるので、すぐに気がつく。読むのが遅くても目立たない。

また、「速読」を取り入れるとよい。できる限り速く読むのである。最初に、授業者が見本を見せるとよい。そして、一斉に練習させる。“ワイワイ速読”である。その後、タイムを競い合う。全員が立って読み始め、読み終わったら座る。これも、最後までやると、ワーストの順位がついてしまうので、「時間切れです」と言って、あえて終了したほうがよい。１位になった子どもは、授業者と勝負させる。授業者が敗れることもあるだろう。それでよい。

音読には、引き出しが必要である。「斉読」「速読」をはじめ、授業者が読んだ後に子どもたちが読む、学級を半分に分けて交互に読む、列ごとに読むなど、様々なバリエーションから、ねらいに応じて、どの音読を取り入れるかを判断する。

「速読」には、いろいろな効果が期待できる。頭の回転を速くする、テキパキ話せる、集中力を高める、気分を爽快にする。他にもあるだろう。「速読」の後には、あえて、ゆっくり音読させるとよい。自分が音読できるようになったことを実感することができる。

「教科書が読めない子どもたち」というフレーズがある。これは、音読ができないのではなく、意味を理解することができないということである。教科書に書いてあることがわからないのである。では、どうするか。何も新しいことをやる必要はない。昔から行われてきたことではあるが、改めて「音読」の教育的効果を確認し、それを取り入れるのである。「速読」ができれば、意味は理解できているはずである。「教科書を速読できる子どもたち」を増やしていけばよい。